暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〜第七三号〜

冬至（とうじ）　十二月二十二日

数え年

かつてはお正月がくると、皆がいっせいに一つ歳をとりました。数え年です。昔の人はそれぞれの誕生日とは関係なく、お正月に歳をとったのです。今ではあまり聞かれませんが、私も明治生まれの祖母はもっぱら数えで幾つと言っていたのを覚えています。

数え年は誕生すると一歳で、元日を迎えるごとに一つずつ歳を加えるという数え方です。旧暦を使用した明治以前は、約三年に一回の割合で閏（うるう）年が入るため、一年の長さが年によって異なる上、閏月生まれの人は正確には誕生日がわからない、という不都合がありました。けれど、明治に入り旧暦から新暦に変わっても、なかなか数え年の習慣はなくなりませんでした。日本ではお正月は各家庭で「歳神（としがみ）さま」を迎え、新しい年の五穀豊穣と家族の幸せを祈り、その時に家族全員がいっせいに歳をとるのがふさわしいと考えていたからかもしれません。しかし、昭和二五年（一九五〇）に満年齢で数える法律が定められるようになって、満年齢が普及しました。

詩人の大岡信さんは著書で「満年齢で合理的になったが、合理主義一点ばりみたいなところが人生に対する感覚のふくらみをこわしてしまった。（略）お正月にはいっせいに歳をとるという一種の厳粛な感覚が失われていった理由の一つ」と述べています。お正月はかつて歳をとるという節目でもあったのでした。

十二月のことを数え月といい、年の暮れを数え日と呼ぶのも、お正月までを数えて待つ気持ちを表したもの。ならば数え年も歳を数える喜びがあったに違いありません。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁